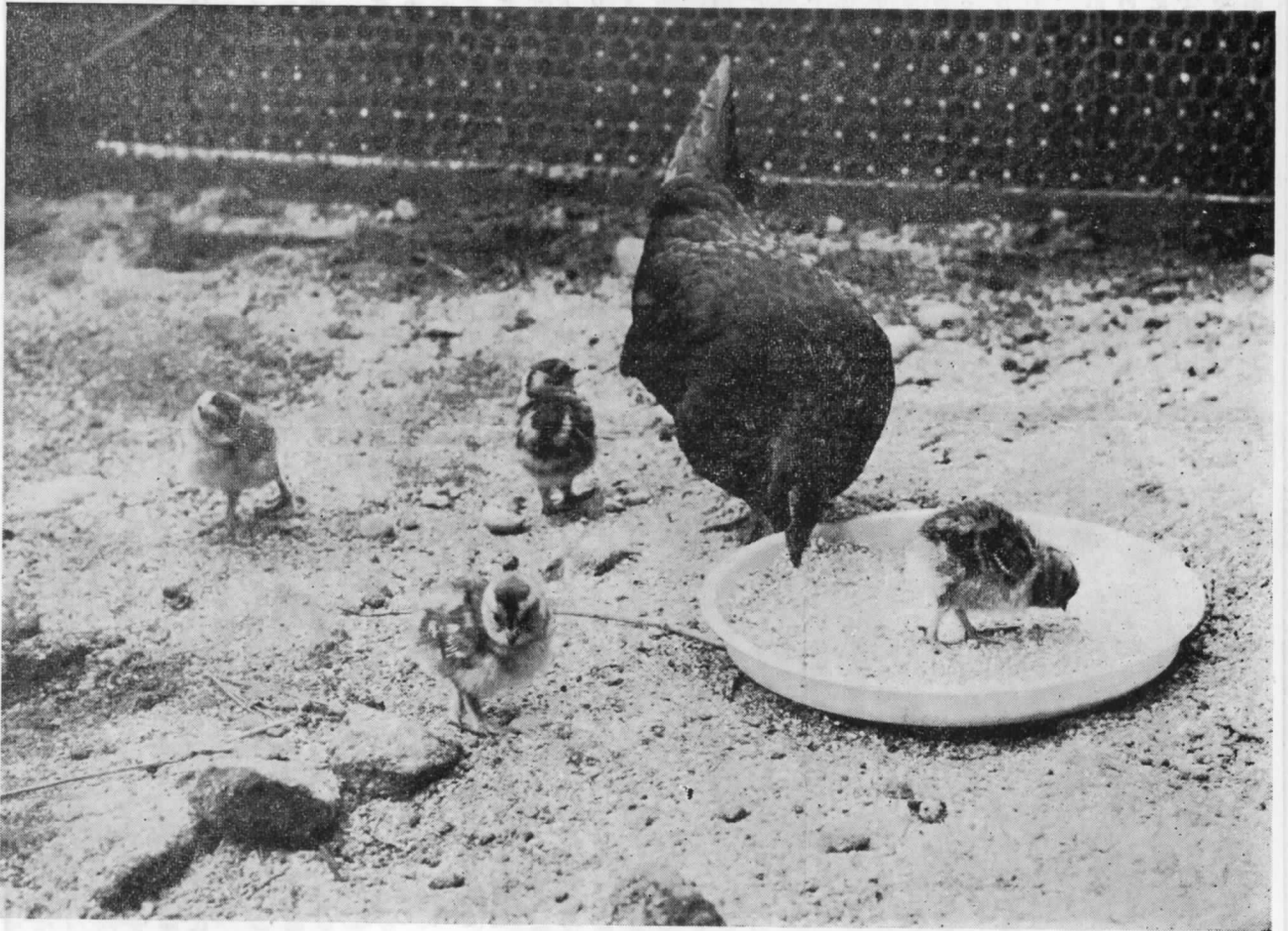


# 山と博物館

第11巻 第6号 1966年7月25日 大町山岳博物館



## 水石雑考

全国的なり水石ブームだという。商売柄出歩くことが多いが、河川に恵まれている北ア山ろくは、とりわけ水石集めが盛んに思う。

仕事に追われる筆者は、水石に興味を持つゆとりもないが「マニア自身としては、さぞ楽しいことだろう」と、ちょっぴりうらやむ気持ちがないでもない。

趣味にもいろいろあるが、大自然がつくり出した水石を集めて鑑賞する——これほど健全で無邪気な楽しみはないかも知れない。

はしかにおかされたように、われもわれもと水石を集めるのもけっこうなことだが、そこは、おのずから「マナー」が要求されはしないだろうか。採取禁止地帯に立ち入って、石を乱獲したり、他人がせっかくな集めた石を、夜中に持ち去るなどの、法にふれるような行為もしばしば耳にする。

隣りの糸魚川市では、採取禁止地帯から「ヒスイ」の原石を持ち帰った市民が関係当局から事情を聞かれたケースもある。また最近、市内に住む知人の一人は、自宅前の庭に配置して楽しんでいた水石を盗まれた、と嘆いていた。

むかしからわ国には「花泥棒は罪にならない」といった風流なことわざがあるが盗んだ人は自分につごうよく「花」を「石」に置き換えたのかも知れない。しかし、このことわざは、花泥棒の心理を風流に表現しただけのことであって、罪は罪である。

水石集めは、元来上品で優雅さに富んだ趣味である。どんな石にも、その石が持つ独自の姿や心があるはずである。昨日までの新人が、きょうはスターダムにのし上がる——といったように、駄石にも無限の価値がひそんでいるかも知れない。

世にいう名石必ずしも名石でなく、自分が採取した石こそ最高のものではないだろうか。いたずらに名石を追って高い金を出したりこそくな手段で手に入れるより、家族連れでハイキングや登山の道すがら拾った石を鑑賞する——こんなところに石集めの真髄がひそんでいるのではないだろうか。要は、自分で楽しむべよのである。

石にとっては、まったくの「石頭」だが、わたくしは、こんなことを思っている。

(米山三男)

# 山のワラジ

## 向山雅重

### 北アのガイド平林高吉さんのワラジ

大町市のすぐれた山のガイド平林高吉さんのワラジがある。

四乳ワラジ——乳(チ)が二対、つまり四乳になっているワラジで、ワラジのもっとも一般的な形であるが、その全体の姿は、いかに山で用いるによい形になっているのが、うかがわれる。

その第一は、ワラジの底の長さが短かいことである。長さ約二十一cm。これは手もとにある幾種類ものワラジの底の長さを計測してみると二十〜二十六cmであって、これほどに短いワラジに接していない。このことはワラジを履いたとき、足のユビがワラジの底より前へ露出するということになる。このユビの部分地面へ直かにあたるといふことは、足の確保の上に重要なことであり、ことに山の登り、あるいは岩角を上るといったときに効果があらわれてくることなので、山ワラジの第一の要件になるわけである。このため、昔はスワラジといって、素足へ直かにワラジをはいたもので、これが一番歩きよいわけである。足に甲掛ケを穿つようになっても、文字通り甲掛ケであって、足のウラの部分はなく素足と同じ効果があがるような作りであった。名ガイド上条嘉門治翁がウエストンとやらんである写真、また明神池で岩魚をとるため後に乗っている写真——そのいずれとも、甲掛ケをはいていて、その下から足のユビが全部露出しているのがはっきりわかる。この嘉門治翁について、その子息上条孫人さんにかがったところ、「オヤジノアシノウラは、ちょうど熊のアシノウラと同じような感じがあった」という意味の手紙を下さったことが

ある。スワラジ、又は全くの甲掛ケで山野を歩いた足というものは長年の鍛練で、そうした姿になるのは自然であらう。甲掛ケから甲掛足袋になっても、ユビ先の部分がワラジの底より先へ出ていれば足の確保に効果は大きい。平林さんのワラジはその為に効果があることがわかる。

第二に、底の短いのに比して幅が広い。幅九〜十cmで、先の方がやや広くなっている。これはアシノウラの形になっていて自然である。平地を歩くワラジはやや幅が狭い方が歩きよいが、山地ではあまり狭いと足を痛めやすいので、やや広くなる。

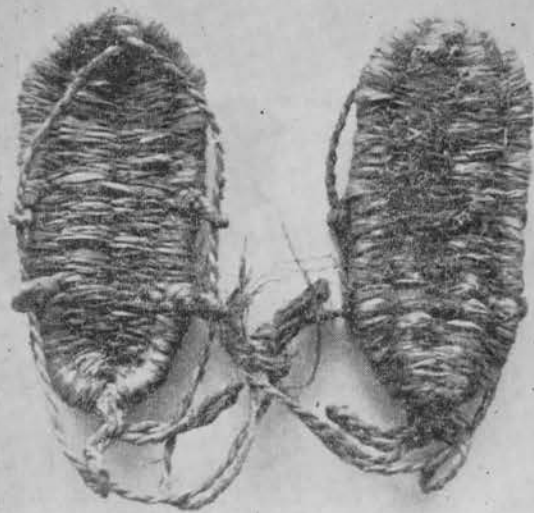
第三に、二対の乳が前に出ている。殊に前の乳が、底の中央よりやや前に位置していることが特色である。一般に乳が前に出ているほどワラジが足へ密着するので、山ワラジには具合よいわけである。平地を歩くワラジ——つまり里ワラジは一般に、二対の乳が後にさがっているのが普通である。

以上丈が短く幅広で、乳が前に出ていると、いうことは山ワラジの要件をよく満していることである。次に注意すべきことは、ワラジのカエリを後の乳に通じてないことである。つまりワラジの紐を、前の乳

後の乳へ通してから、カエリに通じてあることである。これはカエリ(カエシ)を短く作ってあるタイプで、言わば短カエリ型ともいえるべきものである。信州でも北へよるとこの型が主になり、南信方面ではこの型は見られず、カエリの先を後の乳へ通し、そこへワラジの紐を通すタイプ。言わば長カエリも型というべきものばかりである。

南安曇郡奈川村神谷の奥原誠一翁は、この短カエリ型ともいえるべきものを「オйкаケ」長カエリ型ともいえるべきものを「トウシワラジ」と言っておる。そしてトウシワラジの方が穿きやすいが、ブドウの皮で編んでツマ先のない足袋のような形にしたフンゴミというものを素足にはいて、そこへワラジをはくときには、オйкаケでない、フンゴミがぬけ易いという。

平林高吉さんのワラジ



が斜めに踵の上、くるぶしの下へかかってくるので、紐の扱い方によっては、そうした効果があるものと思われる。トウシワラジのときは、一般に、紐をカエリに引掛けて締める穿き方をするので、踵への確保は相当によい筈であるが、あるいはオйкаケの方が効果があがるのかもしれない。

オйкаケII短カエリ型。トウシワラジII長カエリ型。この二つはワラジのカエリの姿として重要な分類の基準になるものである。平林さんのワラジが、オйкаケになっていることは、この地方の一般の姿を示すものであるが、また、雪上にフンゴミなどをつけて穿くときの必要から自然この形をとってきたものである。

ちなみに、奥原翁は、「トウシワラジ」を作るとき、足へ掛けて作り始める時のシンナワ(芯縄)の長さを右手のオйкаユビとナカユビをかるくのばして二回(二はい)と、ナカユビの先の二節の長さをとるが、「オйкаケ」のときはオйкаユビとナカユビをかるくのばして二はいだけの長さにすると言っている。このシンナワで作れば底が定って、カエリの部分が、トウシワラジは長く、オйкаケは短く出来上がるわけである。

ワラジを作っていくて、作り止めにして、あとシンナワをカエリにする。このトメの仕方に組ミ止メと巻キ止メとある。シン縄を組ミ合せて止める組ミ止メが丈夫なので、山ワラジは一般にこの方法。別の巻を巻いて止める巻キ止メは里ワラジに多い方法。足へのあたりはやわらかいが、ここがほつれてくる場合がある。平林さんのワラジが組ミ止メになっていること、まことに自然である。

「毛一里、緒一里、ナカ三里」という。これはワラジの保ちをいった言葉。ワラジの底(ナカ)の裏へ、藁を縫いだした時の藁の根本が出てくるもの、その他藁が毛のように出ているもの。これらを総称して「毛」といっている。この毛が底の裏へあまり長くなく出ているのもワ

# 大町市の積石塚

原田 肱

の保ちの上に好ましい。  
以上見てきたように、平林さんのワラジは  
一見何の特色もないようであり、仔細にみれ  
ば山ワラジとして必要な要件を具備している



(昭和四一・七・一三記)  
(日本山村民俗の会々員)

のに驚く。これこそ其の民具と言ことができ  
るといふものであろう。

大町市の北部、平地区の尻無から新郷にか  
けての原野と、森部落西方の山腹に、考古学  
上特に珍しい古墳が存在している。

これ等は、大小様々な形をなしているが、  
何れも自然の山石を使用して円形に築き上げ  
ており、其の中に石室を造り、板伏の大形な  
石にてフタをしてあるもので、大きさは円の  
直径三米から七米位、高さ一米より一・五米  
で、古墳としては小形の部類に入るものであ  
る。

こゝで私が、此れ等の古墳に対して数年前  
より注目して来たのは、郷土の歴史の中に残  
された貴重な文化遺産として、更に珍しい積  
石塚群というものである点であつて、自然環  
境のきびしい此の地帯に、如何なる使命をこ  
なして定着したものか等、種々と疑問を持っ  
たのである。

第一に積石塚についてであるが、長野県に  
おける積石塚の分布は、北信地方に多く、群  
をなして存在しており、なかには史蹟指定と  
なっている大形なものもあり、時代から見ると

と五世紀以降七世紀頃までのものが多いと云  
われている。次に多い地方では松本・東筑摩が  
郡である。この地方のものは方形の積石塚多  
く、この面からいうと北信地方や、大町市の  
円形墳と異なり、氏族系統がやゝ異なってい  
たのではないかと思われ、この人達の氏族を  
明らかにした記録としては、次のものがある

統紀延暦八年五月庚午条の「信濃国筑摩郡  
人外少初位下後部牛養无位宗守豊人等、賜姓  
田河造(みやつこ)」、後紀延暦十六年三月癸  
卯条の「信濃国入外従八位下前部綱麻呂、賜  
姓安坂」、同延暦十八年十一月甲戌条の「信濃  
国入外従六位下封妻直老後部黒足、前部黒麻  
呂、前部佐根人、下部奈豆麻呂、前部秋足、  
小県郡人无位上部豊人、下部文代、高麗家継  
、高麗羅福、前部貞麻呂、上部色布知等言、己  
等先高麗人也、小治田(推古)、飛鳥(きん明)  
二朝廷時節、帰化来朝、自爾以還、累世平民  
、未改本号、伏望、依去天平勝宝九歳四月四  
日勅、改大姓者、賜直老等姓須々岐、黒足等  
姓豊岡、黒麻呂姓村上、秋足等姓篠井、豊人

等姓玉川、文代等姓清岡、家継等姓御井、貞  
麻呂姓朝治、色布知姓玉井」である。

又同じ積石塚であっても、塚の上部に屋根  
型の石室を有するものが北信地方に相当あり  
、これは同じ朝鮮の中の一國であつた百濟(こ  
くだら)の文化を受けたものといわれ、百濟  
の國からの帰化人も多く定着していた事が想  
像されるが、特に全国的にも有名な、長野市  
の善光寺が、別名を百濟寺といわれ、六世紀  
より七世紀にかけて創建されている事実は、  
此の地方に強力な勢力をもつ百濟系帰化人の  
存在を物語るものであり、当時の大和朝廷の  
意図が、東国開発と対蝦夷地への勢力振展に  
あつた事をうかがわしめるものである。

以上の例に見られる如く、大町市の場合、  
この積石塚が高麗系のものか、百濟系かは現  
在の表面的考察では判別しがたいが、何れは  
これ等の古代満州から朝鮮半島における所の  
文化を受けた人々の定着によつて残されたも  
のである事は容易に想像され、形の大小と色  
々ある点については、これを一時代のもので  
なく、数世代の年月を此の地方に定着して築  
いたものと解したいのである。従つて、古い  
もの程大きく、形も整っているが、順次簡素  
化されて小さくなつて来たものと考えられ、  
この事も定着年代を推考する手がかりとなり  
得よう。

では、大町市の場合、何時頃のものであつ  
たものか、実年代を考へる場合、古墳の大きさ  
に尺度を当て、見ると、須坂市八町の鎧塚第  
一号墳(径三・三米、高三・五米)、中野市新野の  
金鑑山古墳(径二・二米、高一・六米)、埴科郡  
松代町桑根井の空塚(径一・七米、高三・四米)  
同東条の王塚古墳(径三・四米、高六・七米)  
同笹塚(径二・六米、高三・六米)等は北信地方  
の代表的なものであるとされ、此の内、鎧塚  
第一号古墳が、五世紀にさかのぼるものとさ  
れ、他のものは、それより若干時代の下の六  
世紀初頭、もしくは半ばの頃と考へられてい  
る。これで見ると、大町市の場合、尻無のもの  
最も大きくて、径約六米、高一・五米といか

小形である点、およびその年代を推考する事が  
出来よう。八世紀後半を中心とした頃のもの  
ではないだろうか。

次に、此の様な時代に入つて、なぜに比の  
地に生活を送らなければならなかつたものか  
此の地方がどの様な歴史的環境に存在して  
いたものか、少くも此の問題を追求し、其の  
上に立てて、私なりの考えを述べて見たい。  
信濃国が、東山道の一國として、対越蝦夷  
の前線基地として古い頃より大和の朝廷より  
重要視されていたらしい事は、南北信に数多  
い大和系の前方後円墳の存在や、古い積石塚  
群等により想像されるが、安曇地方に於ては  
此の公式論からやゝ外れて、古い時代の強い  
古墳文化は現在の所発見されておらず、郷数  
も四郷で最も小さく、従つて人口も少なく、  
文化的にも非常におくられていたものではな  
かつたかと考へられるのである。これは当時の  
官道であつた東山道からはなれており、更に  
気象と、土地条件が、当時の農耕技術をもつ  
ては容易に打勝てないきびしさがあつてのも  
のであろうと思われるからである。

私はここに一つの仮説を提出し、近く期待  
したい本格的調査の意義の大きさを思いなが  
ら、文化財保存が、現代に課せられた我々一  
市民の日常での意志として広まりゆく事を念  
願する次第である。

信濃国の国府(県庁)が現在の上田市附近か  
ら松本市附近に移されたのは、奈良時代に入  
つての事といわれている。国府の移動と共に  
、それまでも行なつて来たであろう隣国との  
交易、又は連絡の為の道路が新たに開発整備  
され、要所には中継点も設けられ、ここには  
運搬を目的とした馬も相当用意されていたと  
考へられ、此の馬の育成に、当時技術的に高  
いものを持つていた帰化人を当てられた事は  
各地に例があり、大町市の場合も此の様な意  
味があつて、特に雪深い此の地に秀れた帰化  
人が配置されたものではないだろうか、此の  
場合、国府より安曇路を通過し、越後越中方  
面の北陸道諸国との連絡路を切開いたものと  
考へたい。特に、塩によつて代表される海産  
物は、山国信州に於て最も必要なものではな  
かつたかと思ふものである。



# ◆◆キセキレイの巣作り◆◆

長 沢 修 介

漂鳥であるこの鳥は雪どけと同時にこの地方に姿を見せるが、同じ頃にやって来るムクドリ等のヒナがかかる頃になってやっと巣作りを始めた。

燕などは姿を見せてから一〜二週間もすると巣作りを始めるのに六月に入ってから巣作りにかかったのだからあるいは他の場所です一度失敗したのかも知れない。

巣作りにかかる一週間程前から雌は毎日朝早くから巣が良く見える場所が高らかに囀っていた。その場所も巣から大体一〇〇m以内の建物の屋根、電線等良く周囲を見渡せる場所を選び、一定のコースを定めて廻っている様子であった。巣作りは雌雄協力して巣材を運んでいる様子であったが、その回数には雌の方がはるかに多く、雌はあまり鳴きもせず黙々と巣作りを専念している様子だった。巣は土蔵の窓に作られたので、その下をネコや犬が通ろうものなら大変な騒ぎで、それを追いやっていくのを見かけた。私は巣作りを中止するのを恐れてヒナのかえるまでなるべく近寄らない様にし、土蔵の持ち主にもその旨を依頼しておいた。幸にしてこの鳥は昔から農家には農業に有益な鳥として広く知られているため快諾してくれたのでこの土蔵の窓は以後一切りとなつたままであった。

六月の末、一週間程留守をしたので帰って来て、もうヒナがかえつたのだら



うと、双眼鏡で見ていると雌雄で交互にヒナにエサを与えているので一安心、カメラを持ち出して撮影に入つた土蔵の中の暗闇から逆光線での巣を写すとあつて仲々思うように出来なかつた。親鳥は二羽一緒に来るか、前後して飛来し、ヒナにエサを与えヒナの大きな糞をくわえて飛び去つて行つた。

## 博物館だより

### 41年度博物館協議会委員

大畑正己、荒井好美、川上隣雄、原かつゑ、大谷昇、久田保稔、宮下潔、一志五郎、荒山幸久、工藤邦夫、広川光栄、薄井脩助、柴田吉鷹、宮田清、青木治、菅沢幸雄、内山慎三、山本携拳、福島融、種山万森  
(順不同、敬称略)

### 雷鳥の人工孵化

去る七月十日北アルプス蓮華岳より採卵してきた八個の卵が孵化した。  
十〜十一日早朝二羽十六日正午四羽十七日午後一羽十八日午後一羽と孵化した。そのうち四卵は母鶏孵化、四卵は孵化器等により人工孵化したもので、現在元気に育っている。

### カモシカ幼体受け入れ

七月十日午後八時過ぎ、生後十日位と推定される雄カモシカの幼体一頭が山博に引き取られた。

このカモシカは山菜取りに行った、昭和電工大町工場社員奥原寛司さんら三名が東京電力第三発電所付近で保護したもの。

日曜日を利用して仲間三名と山菜を取りに高瀬川入の北葛沢に入り、山菜を運ぶ下山中にあとからついてくるカモシカの幼体に気がつき、山に帰そうとしたが帰らず、時刻も午後七時をすぎたので恐れもあると保護して山博に電話連絡してきたもので、早速新しくできた放養園に収容され、現在係から山羊の乳をもらいながら元気に育っている。

### 山の自然科学教室は中止

第九回を数えた山の自然科学教室は、都内杉並区の中学生の参加希望が少く本年度は中止することになった。北信群発地震の影響もあると考えられるが、残念なことだ。

東京教育大学野外生態研究会では今後一年の間に地震に対する理解も深まり又、大町地方は地震の影響を受けないということが、都民にわかつていただけるだろうと、三十余名の会員が、来年二十二日から二十五日まで山博職員とともに予定の全コースを踏査し、研究調査にあたり四十二年度第十回の山の自然科学教室開設の準備中である。

### ◎御寄付ありがとうございました

ございました

★フクロウ大羽才治★ヤマウサギ北安地方事務所、大町駅、大町高玉井、栗林精善、一本木英雄★ゴミ籠青年商工研究会★ハンプトガラス西谷長治★ノスリ大羽博隆★カモシカ幼体高橋宗三外、奥原寛司★世界哺乳類図説二冊日本山岳会★パンフレット長野コカコーラボトリングK・K★座初八日町分館★八万尾根模倣教育大野外研★製糸用具山岸正彦  
(敬称略)

### 表紙説明

人工孵化したライチョウのヒナ  
撮影海川庄一

山と博物館 第11巻第7号  
一九六六年七月二十五日発行

発行所 長野県大町市TEL(大町)二一

印刷所 大町市下仲町 大糸タイムス印刷部